

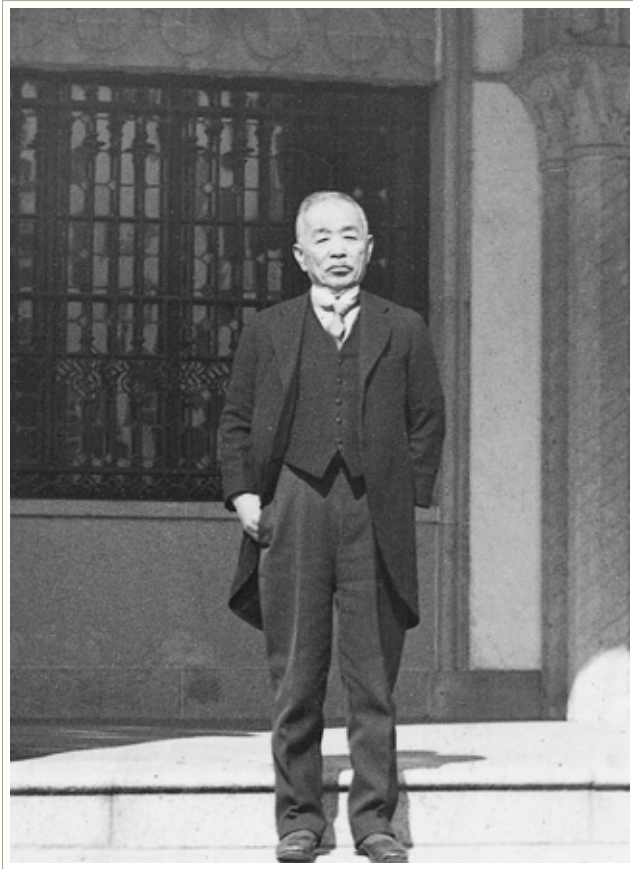
七十老翁
吾立情
共將

35

書卷

禮工
良

晴雨
勢



不
眠
所
移

財団法人
ロマン・ロラン研究所

表紙写真：狩野直喜 東方文化研究所所長時代
(同所玄関前にて。67歳、1935)

背景：宮本正清愛蔵の狩野直喜の漢詩

目次

中国研究を通しての日仏交流	
——京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合——	………
狩野直禎	……… 1
『ピエールとリュース』上演までのおはなし	………
今藤政太郎	……… 20
世界ではじめてロマン・ロラン全集を出版した小尾俊人氏に聞く	………
編集部	……… 25
『最後の扉の敷居で』から	7
………	………
村上光彦	……… 38
関西日仏学館八十周年記念とロマン・ロラン研究所	
共催講演会にあたって	………
宮本エイ子	……… 42
読書会報告	………
………	………
清原章夫	……… 44

〈ユニテ・フォーラム〉

〔読書会に参加して思うこと〕四十五年後の感想……………西尾順子……………46

ロマン・ロラン研究所の活動報告……………49

ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書……………54

二〇〇七年度 賛助会員、寄付者名簿……………55

あとがき……………56

中国研究を通しての日仏交流

——京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合——

狩野直禎

はじめに

一 東大卒業まで

二 清朝留学より京大教授就任まで

三 敦煌学

四 ヨーロッパ留学

むすび —— 狩野直喜のフランス観

はじめに

関西日仏学館設立八十周年という、記念すべき年にあたり、ロマン・ロラン研究所・関西日仏学館共催の講演会に講師を勤めさせて頂きますことを、非常に光栄に存じております。とくに私を御指名頂きました小尾俊人様に厚く御礼申しあげる次第であります。

小尾俊人様には直喜の著作の中で、半数以上をみせず書房から刊行して頂きました。そしてその出版の橋渡しをして下さいましたのが、宮本正清先生でございました。実はいささか私事にわたりますが、私が祖父直喜と同居するようになりましたのは昭和二〇（一九四五）年の一月のことでありましたが、そのころ先生は週に二、三回拙宅に御出でになり直喜に手当療法をして下さりながら、いろいろな話をしておられました。もとより同席を許されることもなく過ぎてしまいましたが、宮本先生の御存命中に、先生のごらんになった祖父のことをお聞きしておけばよかったです、悔まれております。

前置きはこれ位にして、本論に入らせて頂きます。

一 東大卒業まで

狩野直喜（明治元（一八六八）年二月一日生、昭和二二（一九四七）年十二月一三日歿、八〇歳。明治元年というのは、陰暦を陽暦に換算した時のもので実際は慶応四年）熊本の人。字は子温。号は君山・半農人・葵園。幼名は百熊。狩野家は細川藩の藩儒であった。

幼少時の生活は決して、無事安泰ではなく、八歳で父に死別。一〇歳の時に西南戦争が起こり、熊本は戦場となり、郊外に転居した。此の時母親が亡くなり、直喜は祖父に育てられることになった。戦争中、薄暗い電灯の下で、「疎開の経験があるのだ」とよく話してくれたものだ。

直喜は幼少のころより神童の噂が高く、

「熊さんは詩（漢詩）というものを作る」

と言われ、九歳（別の説もある）で旧藩主（細川護久）の前で経書を講じた。

西南戦争が終り、明治一二（一八七九）年、熊本で佐々友房（克堂）が漢学塾同心学舎を起こし、漢学と数学と撃剣を教えた。直喜はそこに入学したが

「自分は身体が弱かったので、撃剣はしなかった」

と言っている。同心学者はやがて県立中学済々黌（現済々黌高校）となり、直喜はそこを卒業。そして一七歳（明治一七、一八八四）で、三角から船に乗り上京した。東京ではまず神田共立学校に入学、英語と数学を学んだ。高橋是清（一八五四〜一九三六）が英語教師をしていた。そして第一高等学校に入学する。英語は熊本時代から学んでいたにしても、恐らくフランス語・ドイツ語はこの一高時代に学んだのではなからうか。語学は天才的と言われ、英語は完璧、フランス語・ドイツ語もそれに近い状態であった。もっとも桑原武夫によると *C'est un grand écrivain* と冠詞を二つ続けるようなことがあったそうだ。

地理学者、京大教授の小川琢治（一八七〇〜一九四一、貝塚茂樹・湯川秀樹・小川環樹兄弟の父）とは一高時代の同学であった。多分このころであろうが、直喜は英文学を専攻しようと考えたことがある。しかし或る人から「英語を母国語とするものにはとてもかなうまい」と言われ、その道には進まなかった。もしかしたら漱石と東大で同学になるところであった。

当時一高の校長は同郷の先輩木下広次であり、後の直喜が京大教授となった時の京大総長（初代総長でもあった）も木下広次。直喜は常々木下を大恩人と言っていた。木下は明治八（一八七五）年にフランス法学研究の為に留学。そして後にまた名前を出すのが、織田萬（一八六八〜一九四五）は木下の弟子。フランス法を研究され、明治四二（一

九〇九）年日仏協会京都支部の設立の重要人物でもある。

結局大学では漢学科を専攻した。東洋史学者・京大教授の桑原隲藏（一八七〇～一九三一、桑原武夫の父）は東大漢学科のやや後輩である。又漢学科以外の文科大学には夏目漱石・高山林太郎がおり、さらに西田幾多郎ほか後に京大教授として同僚になった先生方が多くいた。

狩野直喜は東大において、島田重礼・竹添井井等に師事したが、島田重礼が特にその師であったということができよう。島田重礼は清朝考証学を講じていた。狩野直喜は「私は考証学です」としばしば言っておるが、その途は島田重礼に師事した時に始まった。

一体我が国では、江戸時代、儒教の研究は朱子学が主流であったわけだが、狩野直喜はその伝統を破り、考証学の立場に立ったのである。

では考証学というのはどういう学問だったのか。簡単に述べておく。

此の学問は中国で明末・清初（十七世紀の初め）に形成されていた。そのころ中国の学問の中心は宋代（十世紀）に始まった朱子学、明代中期（十五世紀末～十六世紀初）に成立した陽明学であって、その学問は自己の見解によって、経書（四書五経）を解釈してゆこうとするものであった。これに対し、考証学は経書・史書等の古典の文章を、根拠をあげて証明し、その証明された事実によって中国の思想・文学・歴史を考えていくことを目的とした。実事求是と言う。そのためには古典に使われている文字の意味を、それが使われた時代にはどのようなものであったかといった、言語学的な研究も必要とした。中国ではそういう学問をそれまで小学と呼んでいた。顧炎武（一六一三～八二）、黄宗羲（一六一〇～九五）、王夫之（一六一九～九二）らによって始められた。なお黄宗羲はその政治思想から中国のジャン・ジャック・ルソーなどと言われることもある。それはさておき、狩野直喜はとくに顧炎武を高く評価した。彼の著である「日知録」は愛読の書の一つであった。

二 清朝留学より京大教授就任まで

大学を卒業したが就職先がない時期が続いた。そして明治三三（一九〇〇）年、文部省から留学生として北京に派遣される事になった。これはすでに明治三〇（一八九七）年に創立しておった京都帝国大学に文科大学を置くことになったので、その教授になる事を前提としていたと聞いている。そして直喜を推薦したのが木下広次であったようだ。それまで文部省の派遣する留学生は、すべて欧米であったわけであるから、異例の事と言えよう。もっとも新村出によれば直喜は清朝から英仏に赴くことを希望したが文部省が、狩野は英仏語はできないと見て清朝だけになったのだそうである。

直喜は四月到北京に赴いたが、六月に義和団の乱（北清事変）が勃発し、日本大使館に籠城する事になった。その功をもって金鷄勲章を頂いている（功八級）。服部宇之吉（一八六七〜一九三九、漢学者、東京大学教授）、古城貞吉（一八六七〜一九三七、幼少からの友人で同心学舎にも共に入学した。『中国文学史』の著あり）、石井菊次郎（一八六六〜一九四五、外交官、駐仏大使・外務大臣）といった人が籠城組におった。なお後にお話しをするフランスの学者ペリオもこの時フランス大使館に籠城していたが、特別の交渉はなかったようである。

八月に入り囲みが解けて一旦帰国。しかし翌三四（一九〇一）年、今度は南清に留学を命ぜられ、上海に赴く。此の時

「ついでに、The North China Branch of the Royal Asiatic Society を訪れた」

と言っておるが、此の時、ヨーロッパの中国研究と接触する機会が多かったわけである。

ヨーロッパでは中国研究をシノロジーという (sinologie)。日本では支那學と訳した。中国の事物に関するすべての学術的研究を指す言葉であるが、通常は哲学・宗教・文学・言語・歴史・美術など、中国文化全体を対象としたものを言い、動植物や地質・気候等自然現象の研究は含まない。

十六世紀の末に、ヨーロッパから宣教師が中国に来て、本国に種々の報告を送った事に端を発するが、十八世紀末になって、真に学問的に取り扱われるようになる。その間、フランスは常に先進的な地位を占めていた。狩野直喜は「公平にいつて、将来はいざしらず過去及び現在（これは一九一〇年ごろ）において、支那学の最も盛んなるは、仏国であらうと思ふ」と言っている（続狗尾録）。シノロジーはシアンズ・フランセーズ science française とも呼ばれることもあるくらいである。

他の科学同様、我が国に中国に関する真の科学的研究が生まれたのは十九世紀末で、それにはシノロジーの影響が大きかったのであるが、狩野直喜はシノロジーの日本への紹介者の一人であり、それは上海留学に始まると言ってもよいであろう。

ヨーロッパ人が中国の古典を研究する場合は、これを外国の文献として、フィロロジ（Philology・文献学）的立場から検討せねばならぬわけで、それが古典の精確な意味を読み取ろうとする考証学と共通していることも、その共感を呼んだ大きな原因である。又、ヨーロッパ人の学者達が、江戸時代の儒者が捨てて顧みなかった戯曲（元曲）・小説への積極的な関心、さらには道教に代表される、民間の風俗習慣の研究を行っていることにも、直喜は共感を抱いたのであった。直喜は元曲研究においては我が国のバイオニアであり、「支那小説戯曲史」（みずす書房）は講義の原稿をまとめたものである。元曲はフランスではすでにバザン（Bazin）が十八世紀に研究している。

狩野直喜が京都大学で教鞭を執るようになり、その最初の講義である「支那哲学史」にはフランスの学者のものである Henri Cordier; Bibliotheca Sinica, Dictionnaire Bibliographique des Ouvrages relatifs à L'Empire chinois

Alexander David: *Le Philosophe Mehti et l'idée solidarité*などを参考書として挙げている。今回の発表では以下イギリス人等の書いたものは省略する。又直喜の初期の論文には道教やシャーマニズム(巫)に関するものがあり、イギリス人やオランダ人の業績が参考にされている。

さて話が少し先に行ってしまったが、直喜が上海でしばしば出入りした、*The North China Branch of the Royal Asiatic society* はイギリス王立であるが、フランスは一八九八年にサイゴン(現ホーチミン市)に *École Française d'Extrême Orient* (極東学院 遠東学院)を置き、一九〇〇年にはハノイに移している。

さて、一九〇三(明治三六)年、留学から帰って参り、京都に住む事になったが肝心の文学部の方は、日露戦争開戦直前でもあり、なかなか予算がつかない。それで京都大学の図書館にとめた。「わしの書いたカードが今でもある筈だ」などと言っておった。又法科大学の教授で先に挙げた、フランス法の専門家であった織田萬が台湾総督府から委嘱されて、旧慣調査の事にあたっておったが、直喜は織田の命を受けてこの事業を助け『清国行政法』を刊行した。その第一巻は明治三八(一九〇五)年に刊行されている。これは狩野直喜の名を署せざる著作と言われている。

東洋史学者で京大教授であった宮崎市定は、「昭和一〇(一九三五)年、フランスに留学する時に、日仏学館で宮本正清先生からフランス語を習った。宮本先生は私の先生であるのに、宮本先生は私(宮崎)のことを先生と言って下さった」と言っておられるが、宮崎が清国行政法について、「この空前の名著は清朝法典の記述を一度解体して、改めて西欧の体系の下に、清朝の行政法を列べ直して理解せんと努めたもので、この際清朝法典の素材を読解するにあたったのは、当然先生(狩野直喜)の任であった筈である」と述べている。

其中のようやく文学部の開設がきまり(明治三九年)、狩野直喜は五人の開設委員の一人となった。まず哲学部が設けられ、支那哲学史を担当した。四〇年、文学博士の学位を受け(この年、史学科が開かれる)、四一年、文学部の開設で文科大学は完成したが、直喜は支那語支那文学担当を兼ねる事になる。

狩野直喜は文学部の学科構成を、哲学科・史学科・文学科とせず、エジプト学、アッシリア学、インド学、シナ学、日本学といった分け方にし、その中で哲学・史学・文学を専攻させる事を望んでいたようであるが、これは結局実現しなかった。京都の文科大学が中国関係の学問を重視したことは、支那哲学科は二講座。支那文学科も二講座として東洋史学は三講座あったことからわかる。

三 敦煌学

ところでヨーロッパ諸国は十九世紀にいわゆるシルク・ロード（中央アジア。中国では古くから西域と言っていた）探検を競い合っていた。シルク・ロードの命名者はドイツの地理学者リヒトフォーフェン（一八三三〜一九〇五）などである（この人は幕末にプロシア大使の随員として日本を訪れている）。中央アジア探検は文化的というより、むしろ最初は軍事的意味合いがあった。なお日本では、西本願寺の大谷光瑞法主が自らも出かけた大谷探検隊が派遣されたが、これは我が国に仏教が来た道をたどるためのもので全く文化的で軍事的な意味合いはなかった。

ところで中国において、シルクロードの玄関口になったのが敦煌である。漢の武帝五十四年にわたる治世の末年に近い紀元前九三〜九二年に置かれた。

シルクロードの玄関口であるから、インド或いは西方からの文化は有形・無形を問わずここを通じて中国に入ってくる。仏教ももちろん例外ではない。北伝仏教と言う。これに対してインドから東南アジアを通じて入ってくるものを南伝仏教と呼んでいる。

インドでは西インドにおいて cave temple（石窟寺院）が創られ、東トルキスタンを通過して中国に入ってくる。敦煌では西暦三六六年に（前秦建元二）開かれ、以後モンゴル族の元朝の時代まで約千年の間に鳴沙山に千仏洞と呼ば

れる沢山の石窟寺院が作られた。

さて一九〇〇年ごろ、王道士というから道教の僧侶であろうが、彼がこの千仏洞の住職となり、封鎖されていた第十七窟の一室に古い書物や絵画・古文書が非常に多く収められている事を発見した。それでこの洞窟は藏経洞と呼ばれることになる。それは漢文だけではなく、西夏等其他のアジアの言語の文書も含まれていた。

一九〇七（明治四〇）年、イギリスの探検家でハンガリー人のスタイン（Sir Aurel Stein、一八六二～一九四三）が彼の第二回目の中央アジア探検の折、敦煌に立ち寄り、王道士を買収して、道士が発見した仏典・古典籍・古文書等から選り出して数千巻をイギリス本国に持ち帰った。彼は中央アジア探検の功績でサーの称号を貰った。これはBritish Museumに所蔵されている。そしてその翌年、今度はフランスの東洋学者ポール・ペリオ Paul Pelliot（伯希和、一八七八～一九四五）が、中央アジア探検の帰途、敦煌に行き王道士から文書類を手に入れ、本国へ送らせた。現在パリの Bibliothèque Nationale に収められている。

ペリオは、エドゥアール・シャヴァンヌ Édouard Chavannes（沙畹、一八六五～一九一八）について中国語を修め、サイゴンに赴き、ハノイの極東学院の研究員になり、一九〇〇年には、北京に籠城した事は前にも述べた通りである。

さてペリオは極東学院の命を受けて中央アジア探検に赴いていたので、ハノイに帰って報告する義務がある。それで彼は中国内地に入り、北京に立ち寄ってハノイに帰ったが、実はこの時敦煌文書の一部を持っていった。しかしこの事には一言も中国ではふれていなかった様である。正式の報告がすんでからと考えたのであろう。

それだから中国政府も中国人の学者も、敦煌でおこったことは全く何も知らなかった。王道士は何も政府に報告しないし、スタインもペリオも中国政府や学者とは無関係に文書を買収し、本国に送ったのである。今ではとても考えられないことである。

ペリオはハノイに帰った後、もう一度北京にやって来た。そして中国の学者達に敦煌文書のことを話し、実物も見せた。一九〇九（明治四三）年のことである。ペリオは“En 1909 j'ai montré ce fragment à quelques étudiants pekinois”と言っている。

清朝政府は急いでまだ残っている文書類を北京に持ってこさせた。

日本へは狩野直喜・内藤虎次郎（湖南）の友人であった羅振玉と当時北京に居た田中慶太郎（氏は東京本郷の漢籍専門の文求堂という書店の主人）から伝えられた。そこで、日本では先ず京都で敦煌学が盛んになった。神田喜一郎（当時は京都一中の生徒であられた）の「敦煌学五十年」はこの間の事情を詳しく述べておられる。京都大学では明治四三（一九一〇）年に、内藤・狩野・小川（琢治）三教授と富岡謙蔵講師（鉄斎の令息）、浜田耕作講師（後に京大総長）の五人を北京に派遣し、古書の調査にあたらせた。しかし、スタイン・ペリオ・大谷探検隊等が持ち去った後なので、余り珍しいものはなく、稍失望して帰ってきたようである（敦煌研究以外の成果はあったのだが）。

四 ヨーロッパ留学

その二年後の明治四五（一九一二）年七月から（出発直後に明治天皇が崩御され大正と改元）大正二年一〇月まで一年余り（当時大学は十月に始まり翌年六月に終わった）、中国・ヨーロッパに留学を命ぜられ、敦煌文書や、漢代の木簡・尺牘等の調査に当たり、ヨーロッパのシノロジの現状を調査し、シノローグとの面談や交流をなした。

その旅程は先ず北京に赴き約一ヶ月滞在し、シベリア鉄道を使って、セント・ペテルブルグ（聖彼得堡 当時の帝政ロシアの首府。レンングラードと改称。現在はサンクトペテルブルグ）に赴き、巴里に直行して、ここに三ヶ月半ばかり滞在し、イギリスに渡り、倫敦に滞在し、その間にオックスフォードに行き、イギリスにも三ヶ月半ばかりい

て、オランダに赴き、イタリア・ベルリンなどにも旅行して、再度聖彼得堡に行き、シベリア鉄道で帰り、北京に又一ヶ月近くいて帰国した。

レニングラードと言えば、レーニンが十一月革命後の事となるが、幾度も礼を厚くして直喜を招こうとしたと言われている。桑原武夫によれば、直喜は「僕は君主主義者だからね」と、それを断った理由を話したそうだ。

さて話をフランスにしぼる。(この辺りは狩野直喜がヨーロッパ滞在中に、京都大学に送った「海外通信」(二通)「続狗尾録」これは帰国後三回に渡って京大文科大学の機関誌「芸文」に載せた。「沙畹博士の訃をきいて」(芸文)「漫遊視察団」(京都帝国大学学友会誌)によった。いずれも『支那學文藪』に収められている)。パリに着くと、先ずはペリオ・シャヴァンヌの御二人に会った。ペリオは其の時御父上が重患のため、直ぐには会えなかったようだ。シャヴァンヌとは巴里郊外フォンテネー・オウ・ローズにある氏の自宅を訪問している。その仲介をしてくださったのはシルヴァン・レヴィであった。そしてレヴィには京都大学の梵語・梵文語の榊亮三郎が紹介しておいて下さったようである。レヴィにはそのほか、いろいろと親切にもらったと言っている。日仏協会の関係で言えば、榊は日仏協会京都支部の理事、レヴィは大正一二(一九二二)年、京都大学で特別講演を行い、その夜日仏学館で祝宴が開かれている。

なおシャヴァンヌはすでに明治二六(一八九三)年以来、コレジュ・ドゥ・フランスの教授(支那学担当)であり、ペリオは明治四四(一九一一)年に、コレジュ・ドゥ・フランスの中央亜細亞諸国言語・歴史及び考古学講座担当の教授に就任されたばかりであった。

こうしてペリオ・シャヴァンヌ、又レヴィらの紹介もあって、本来の出張の目的である、ペリオが送られた敦煌文書の調査を二月末まで、ビブリオテーク・ナシヨナルにおいて進めていった。ビブリオテーク・ナシヨナルは午前十時から午後四時まで、しかも昼は二時間閉館するので、時間的にはずい分制約されていたわけである。エトワ

ル広場の近くのアパルトマンに下宿し、吉川幸次郎によれば「夜は毎日のように芝居を見に行ったが、西洋の芝居というのは面白くないね」と言っていたそうである。又「見物にも出ねばならぬから」などという文句が「海外通信」中にも見えるから、ルーヴル美術館とかにも行ったことであろう。アパルトマンではしばしば自分の住む階を一階間違えて怒られたそうである。

なお当時インドにおられたスタインに手紙を出して、ロンドンでの調査に便宜を計られるよう依頼して下さったのもシャヴァンヌであった。

敦煌遺書を利用しての研究についてはあまりに専門に過ぎるので省略するが、ヨーロッパのシノロジーについて、直喜は「統狗尾録」という文章を書いて、その歴史にふれながら紹介している（大正三〔一九一四〕二月・三月・二月）。その中で一番、頁数を多くさいいたのがフランスである。その内容をかいつまんで紹介し、併せてその中に取りあげられているシノログについての簡単な紹介をする。

「必竟歐洲に於て、仏国人が最も早く、支那の文学・宗教・言語の研究をやった。其一例として、歐洲諸国の大で支那学の講座を一番先に置いたのは何処かというに、自分の寡聞を以てすると、彼のコレジュ・ドゥ・フランスで Abel Rémusat (1788-1832) が最初の支那学教授として同校の講堂で就任演説したのは実に紀元一千八百十五年五月十六日の事で、今（一九一四）を距る九十九年前、仏国の大学では已に支那学専門の教授が居たのである」

なお補足すればレシユザは Société Asiatique を起し、機関誌 Journal Asiatique を編輯した。「塞外民族言語学」（二八二〇）、「漢文啓蒙」（二八二二）、「法顕伝（仏国記）」訳注等がある。

フランスが一番古いことを証明するためには他国の状況を見る必要がある。そこで

「英国牛津大学で James Legge のために支那学の講座が設けられたのは一八七六年、同じく八八年に、ケムブリッジ大学で Thomas Wade が支那学最初の講座を充した（英仏の差は六十年余ということになる）。ドイツでは Gabelentz であるがむしろ言語学者といった方が適当で、荷蘭から引張って来た伯林大学 Grool 氏が最初であろう。露国では彼得堡大学で一八五四年に、支那語学科が始めて入り V. Vasilief が実に最初の支那学教授であった」

と続ける。さらに狩野直喜は

「支那に関する興味が一般に拡がって、其研究をやってみようと思ふ人があればこそ講座を置かれた」

とその理由を考える。

「西洋で支那学をやる人は二つの種類がある。一は本国に居てやる人。一は支那に往ってやる人である」

といい、どちらがよいとかいけないとか評価はしていないが

「フランスのシノログは前者に属し、イギリスには後者の方が多い。役人として或いは商人として中国に行き、

興味を持ったのである」

と言っている。

ヨーロッパの支那研究が、宣教師によって始められた事は前に述べたところである。ヨーロッパの宗教改革に対し、カソリックが教勢を拡張すべく、アジアに布教を始めたからである。我が国に来たフランシスコ・サビエルなどもその一人。こうした布教中に中国で典礼問題というものがおこった。中国人の上帝・孔子・祖先の崇拝を是認するか否かの問題で、ジェスイット派は是認の立場で布教したが、数の上で劣るフランチェスコ派は反対した。このために中国人の思想や文化に対する関心がヨーロッパにおいて広まった。そこで狩野直喜は次のように述べている。

「千六百八十七年ごろから、仏国生れの傳教士が非常に多くなり、又従つて儒教以外に支那について種々の學術的研究をなした者が佛國人に多かつた」

と述べ、八人の名を挙げている。そして

「この八人の著作を始め *Lettres Edifiantes* とか *Mémoires* などの傳教の有様を述べたもの、支那の文學宗教歴史科學等に就て研究した報告類が沢山出て、佛國の支那學者に利益を與へたのである」

と述べている。

話をコレジュ・ドゥ・フランスに戻すと、「第二代の教授は Stanislas Julien (1799～1873) である」。この人はオ

ルレ안의生れ、「大報恩寺三蔵法師〔玄奘〕伝」、「大唐西域記」の仏訳があり又ジュリアン賞にその名を残している。

「ジュリアンの後を襲ったのが Marquis d'Hervey de Saint Denys。その死後多くの候補者があったが、史記の訳者として早く名を知られしシャヴァンヌ氏が推されてこれに代わり、以て今月に至ったのである」

シャヴァンヌについては、これまでも何回かその名を出したが、まとめておくとりヨンの生まれ。L'École Normale Supérieure、L'École des Langues Orientales Vivantes に学び、北京大使館に勤務し、史記の翻訳に着手した。未完には終わったが（一三〇巻中一八巻）大きな業績である。Mémoires historiques de Se-ma Ts'ien。その他、「大唐西域求法高僧伝」、「唐書突厥伝」、「スタインの依頼で著した Les Documents chinois découvert par A. Stein dans les sables du Turkestan Oriental」ペリオとの共著 Un traité manichéen retrouvé en Chine。その他美術・考古に関するものなど多数に上る。

ペリオ氏は L'École des sciences Politiques、L'École Langues orientales を卒業。第一次大戦中は情報将校、北京公使館付武官。その後は L'École pratique des Hautes études で講義をした。「敦煌千仏洞」「元朝秘史」「聖武親征録訳注」「敦煌資料」等がある。

狩野直喜はさらにフランスにおける支那関係の学科を加えている学校を挙げる。

「L'École des Langues Orientales Vivantes 〓 東洋語学校。ここには一八四一年に支那語学科が入った。最初の教授は元雜劇の翻訳者紹介者として知られて居る Bazin (1799〜1863)。ここも現任の Vissière 氏まで六人の

教授を経て居る。ヴィッシェール氏の外に支那書史の著者として有名なる Henri Cordier 氏も教授として相交らず支那の方面に関する研究を發表して居る。それから L'École Pratique des Hautes études には宗教学科の一部があつて、シャヴァンヌ氏が支那宗教の講義を受持つて居る」

直喜はヨーロッパから帰国後も、ヨーロッパのシノロジエを紹介し、シノロゲとの交流は続いた。

シャヴァンヌは早くに逝去されたが、ペリオとは昭和十(一九三五)年に来日した折再会している。なおシャヴァンヌ氏の逝去にあたっては、前にも申した通り「沙畹博士の訃をきいて」なる一文を草した。パリ留学時に親切にされたことが述べられているが、その末尾は次の如くである。

「博士の男子は今(大正七、一九一八)は從軍して飛行機隊に屬し、數度の戰に、目ざましき働きをなし、功牌さへ受けたといふことである。愛國の熱情に燃て居る博士の事であるから、其子の戰功に對して限りなき誇りと満足を表したらうが、又常に其安否をどれだけ心配したであらうか。其子も先陣の習。恐らく家に還つて枕邊に付し、葬事を治る事もできなかったであらう。共に悲惨の極みである」

父子の情を惻隱し、公事と家事のはざまに立つたシャヴァンヌ家を思う心が切々と響いて来る。「家事を以て公事を辞せず、公事を以て家事を辞す」という中国の古典の一句が、直喜の腦裏を過ぎたのではなからうか。

大正末年に、極東学院院長の Léonard Arousseau 氏が来朝された時には一ヶ月近く、我が家に滞在されておられた。又 Noël Peri 氏とも親しくしておつた。ペリ氏はシノロゲというよりジャパノロゲというべきであらう。能の研究をされたがインドシナ半島諸國と中国との交渉の史実についても研究されていた。

シャヴァンヌの後、コレジュ・ドゥ・フランスの教授であったHenri Maspéroや後の教授であったPaul Demiéville氏などとも交流があった。

マスベロは日仏会館長としても一九二八―三〇日本に来られた。関西日仏学館でも「シナ文明の初期」という題で講演しておられる。

シノロジとは少し離れるが、狩野直喜と同時に、東京帝国大学の教授で京大の講師をしておられた瀧精一も敦煌の壁画の調査のため、直喜と同時にパリに来ておられた。以下は吉川幸次郎の「日本に来なかったロダン」に載せられた文章の一部をアレンジしたものであるが「ロダンの名声が確定したところであるが、ロダンが、作品を日本にもって行って、日本人に示したい。おれの芸術は西洋人には分からなくても、東洋人にこそは分るだろう。金はいらん。運搬費さえ持ってくればと言っているということが、狩野氏の耳に入った。そこで瀧氏と二人は公使館へ行った。公使は北京籠城をともにした石井菊次郎氏であった。しかし公使館の連中は『ロダンなる男の官職は何か。官職のない人間の品物を日本政府の費用で送るわけにはいかん。そういうのだよ』二人はもって帰って、当時は上田敏なんてハイカラがいたさ。あの連中の鼻をあかしてやろうと思っただが」とこのように書いておられるが、こんなやや茶目っ気な所もあった。

むすび——狩野直喜のフランス観

狩野直喜はフランスを、フランス文化を愛していた。又シノロジの先端を歩む国として尊敬もしておった。

世界で文化国民はシナとフランスというのが、持論であった。この点はフランス人の方も異論はないと信じておる。再び桑原武夫の文の一部を紹介すると

『コメルス』誌に、陶淵明の詩が訳され（中略）その序文にヴァレリがシナ人がもつとも文学的な国民だといっていますというに及んで、先生は興味を起こされた。そこでこの詩人の格調の厳正さ、その詩論などを少しばかり開陳した。先生の曰く『ヴァレリというのはよほど芸術のわかる偉い奴にちがいない』

そして次も桑原の文章中にある直喜の言葉ですが

「シナはインテリの国だ。蒋介石がああ勢力を得たのもインテリの力だ。日本には古来インテリがいない。だからシナのインテリを尊重しない。そこに間違いがおこるのだ。フランスには *écrivain* という言葉がある。日本にはそれにあたる言葉はなからう。フランスの文化の高い所以だよ

シナでは何ごともまず「文」である。つまり *forme* だ。内容はどうでもよろしい。しかもシナでは文人は政治に関係している。ここもフランスと似ている。文人は政治のことも倫理のことも書くが、しかし文章がうまくなくては問題にされない。フランスもそうだろう。がんらい政治とか倫理とかは下品なものさ。文章でも上手でなければね」

直喜は *écrivain* という言葉を発した時、中国のいわゆる士大夫をそれにあてて考えていたと思つた。

中国ではちょうど我が国の聖徳太子のころから科挙と申して、試験によって成績のよいものから官吏に採用していた。二十世紀の初めまで千三百年以上も続いた。そしてその試験は経書（儒教の経典、いわゆる四書五経）と、作詩と、作文であった。詩や文には一定の *forme* が要求される。そしてまさに文人が政治の局に立っていた。彼等はこうした科挙を通り、政治の局に当ると同時に、琴棋書画と申すが詩文を作り、音楽や書画をたしなむ。これが士大夫

である。中国とフランスに共通の面を見ていたわけだ。

又、吉川によれば、直喜がよく口にする言葉に *raffine* があったそうだ。此の言葉もいかにもフランスをシンボライズするような言葉である。

こうしたフランスへの文化愛好があって、ヒトラーのナチスドイツがパリを陥落させた報に接した直喜は昭和一五（一九四〇）年六月一八日に、モーニングを着用し、関西日仏学館を訪れ、館長（ロベール氏）に「パリは陥落しても、フランス文化は滅びない」と弔辞を述べた。日本は日独伊三国同盟を結び、ヒトラーが日本でも英雄であった時代にある。

なお翌日、会館の主事をしておられた宮本正清がフランス人を伴って答辞にこられたと、これは祖母が記録を残している

昭和二〇（一九四五）年五月二五日、織田萬は東京大空襲下に防空壕中で亡くなられ、それから一年後、今村新吉が五月一九日、汽車の中で発疹チブスに感染され、京大病院で亡くなられ、又その翌年、直喜が一月一三日老衰で死んだ。

「東洋の文明の真の伝統と、西洋の近代文化の教養と、人格とが、渾然と合致融合した世代の三明星が消えた」と、宮本は記しておられるが、遺族として有難い御言葉だと感じ入っております。

（京都女子大学名誉教授・中国古代史）

『ピエールとリュース』上演までのおはなし

今 藤 政太郎

私は東京で生まれたのですが、第二次世界大戦で両親の家が昭和二十年三月十日の東京大空襲で焼かれまして、それで小学校四年から父の故郷である京都へ一家が移りまして、小学校、中学校、高等学校と卒業しました。ですから京都は第二の故郷であり、自分のいわゆる精神形成、あるいは人間形成の時期のほとんどを京都で過ごしたと言っていると思うんですね。

その京都というのは、特にわたしが高校生までを過ぎた当時には非常に伝統的で保守的でありながら、本当にラディカルな街でした。今でもきつとそうだと思うんですけども、そういうことが自分の精神形成に大いに影響したのではないかと思っています。

さて、今日『ピエールとリュース』をやらせて頂くわけですが、これにはまたとっても沢山の偶然が重なりまして、しかもそれらがみな非常に幸運な偶然だったと思っています。先ず私がこの作品に初めて接したのは、昭和三十一年（一九五六年）大学二年の時でした。ある友達がみず書房の本を持っていまして、「この本いいわよ」と言われて、その友達が男だったら読まなかったかも知れませんが（笑）、女性だったので読みまして、その時に『ピエールとリュース』がとてますばらしい作品だと思ったのです。先ほど宮本さんが話された『ジャン・クリストフ』、もちろんこれはロランの本流中の本流の代表作であることは言うまでもありませんが、ただそれを、私は二回ほど読み

ましたが途中でやめてしまったので、まだその作品によって人生が変わるところまでいっていないのかなと思っています。けれどもこの『ピエルとリュース』、まあロマン・ロランにしたら短編なのでしょうけれど、けっこう読み応えのあるすごくいい作品で、昭和三十一年というと、ぼくはまだ大学生になったばかりでしたが、まだまだ戦争の思い出、後遺症といったものが尾を引いていた時代で、お腹が空いた、寒かった、暑かったなどをはじめ、物不足やさまざまな社会問題にいたるまで、戦争の影響をいっぱい抱えているときに、誰もが戦争の惨禍というものを身にしみてよく知っていた時代でした。

それでこれを読んで一篇の恋物語としてもすばらしい作品ですけれども、それだけではなくて、自分が体験した戦争も含めて「ああ、戦争ってなんと実りのないものなのだろう」と……。そしてこのピエルとリュースに代表されるように、たくさんの人がどんなに辛い目をしたのか、どんなに残酷なものかということその時に思い知ったのです。

それでそれっきりそのままになってたんですけど、二、三年前にNHKの「平積み大作戦」という肩の凝らないくだけたTV番組がありますが、ある時その番組で『ピエルとリュース』が紹介されているのを見まして、「あっ、ぼくは大学二年のとき読んだよ!」と思ってそれを見ていて、どんなあ時代のタイムスリップいたしました。

ぼくはその後自分の演奏会リサイタルを催しておりますが、必ず自分の作った新作をその中に入れて、古典と新作両方を演奏会にとり上げていたのですけれども、「あんな作品を作曲してみたいな」とちょっと思っただけです。だれど試しに朗読してみましたら、表情もつけないでほとんど棒読みに近い音読で二時間かかるんですね。これではとても曲にはできないし、お客様も多分聴いて下さらない。そういうことでしょうかと思っただけですが、……それに先ず原作があって著作権というのがあります。その著作権は当然翻訳なさった方にもあるわけで、それをどういう風にお願いしようかと思ひ悩んでいましたときに、みすず書房に電話をして「この作品の翻訳の著作権者はどなた

ですか」と訊きましたら、宮本正清さんの奥様がご存命だと……、後になってはくより若い方だと分かりましたので、ご存命などという言い方はたいへん失礼なんですけれど（笑）そういうことで、ああ、それじゃ一度お訪ねしようと思いつつ……、実はここで、ぼくが小学校、中学校と京都にいたということが生きるのですが、今日ちようど来て頂いている渡邊富子さんというぼくと同級生に呼ばれまして「あんた、今度の同窓会に出よしゃ」と言われまして（笑）、それなら出ようかと思って行った所に、このロマン・ロラン研究会に所属していらっしゃる岩坪さんという方がおられて、私が「今度自分のリサイタルでロマン・ロランの『ピエールとリュース』をやりたい」と言いましたら、「わたし、宮本先生知ってる」と言ってくれまして、「それじゃ紹介してよ」ということで紹介して頂いて、トントン拍子に上演の許可をお願いした次第です。

少し話が前に戻りますけれども、その前々年に竹田真砂子さん、この方は『ピエールとリュース』の脚色をして下さった方で、とても美しい文章を書かれる女流作家ですけれども、その方が舞踊のために『蟹』という本をつくって下さったんです。それにぼくが作曲したんですけれど、それは万葉集、奈良時代の「防人」の物語ですが、田舎の若い青年達が夫君（天皇）の軍に入って戦争に行つて大概は死んでしまうのですが、そういう防人たちの悲痛な声を詠った作品です。その防人たちが戦死して、そして故郷へ蝨となって帰ってくる。そして自分たちがどういふ風に戦ったか、またどんなに自分の妻や子供や家族のことを想っているかということ語る、そういう本を書いて下さったんですね。それと、この『ピエールとリュース』とがすぐくぼくの気持ちの上で戦争の悲惨さとか権力悪といったものと共通するものがあつたので、それなら『ピエールとリュース』を竹田真砂子さんに脚色して貰おうと思つてお願いしました。そこまではトントン拍子にいったのですが、これを作曲するのはトントン拍子に参りません。何しろ長いものですから全部歌にしたら何時間かかるか分かりません。そこでともかく省略して頂いて、次に朗読は誰がいいだろうと考えた末に知り合いで同年代の吉行和子さんをお願いしました。

肝腎のお話なのですが、第一次世界大戦下パリの少年少女の恋のお話。暗雲垂れる戦火の最中、偶然に地下鉄で出逢った若い男女が純真な恋を育んで行くお話なのですが、明日をも知れぬ厳しい情況がいやが上にも二人の心を駆り立てます。しかしブルジョア階級である彼は、半年先には戦場に赴くことを義務付けられている。一歳年上の彼女リュースは豊かとは言えない階級の出身。絵を画くアルバイトをしながら生活を支えています。まだまだ階級差の厳しいフランスで二人が恋をみならずすることは非常にむずかしい時代だったと思います。

しかし深く愛し合っていたピエールとリュースは二人だけで結婚式を挙げようと教会へ行きます。お互いに結婚を誓い合ったその瞬間に無残にもドイツの爆撃を受け教会諸共死んでしまいます。しかし当時の厳しい階級社会では死をもって償うしか恋をみならずことが出来なかったかも知れません。ほんとうに悲しいけれども美しい結末です。

日本人の僕は近松門左衛門に代表する恋の美意識、心中と言いますか、相対死と言いますか、そういうものが思い起こされるのです。

ロマン・ロランにそういう意識があったかどうか、或いはフランスの読者にそういう思いを抱かせたかどうかはわかりませんが、何か日本とフランスには、そういうことを美しく愛しいことと思う文化の絆があるような気がしてなりません。皆さんはどうお思いでしょうか。

さて、フランスのロマン・ロランを作曲するということについて……、ぼくは三味線弾きですけれども、けっこう三味線を使わない曲もつくっています。どうも三味線というのと何となく江戸時代を彷彿してしまふ。そうではなくて、邦楽なんだけど、ぼくがぼくの音楽の中でロマン・ロランあるいは『ピエールとリュース』というものをどうやったら表現できるのか、という風に考えて作曲しました。それで、言ってみれば、全体がピエールとリュースあるいは戦争で不幸な目に遭われた方へのレクイエム（鎮魂歌）にしようと思いました。鎮魂歌にするにはどうしたら良いか、いちばん簡単なのはフランスですから、キリスト教の聖歌なり賛美歌です。でもこれだけやるんだったら、ぼくが作

る意味がないと思ひまして、それで日本の〈聲明〉とヨーロッパの聖歌や賛美歌、それに厳密な意味では日本の楽器ではないのですが〈笙〉、それにお琴と低い音の出る十七弦琴、篠笛、トーンチャイムという円筒のとてもいい音のする楽器、そして男・女のソロと女声コーラス、これだけを使ひまして、それでもっていろんな宗教を超えてそういう不幸な人を鎮魂しよう、鎮魂するということはそういうことにほくらが学ぶということですが、そういう不幸な出来事をつくらないでということという決意を皆さん方に申し上げたい、メッセージを送りたいと、そういうつもりでこの曲を書いた次第です。そういうわけで邦楽なのに一回も三味線は出てきませんが、聴いてみていただきたいと思ひます。それでは昨年の紀尾井ホールでの演奏録音をここでもう一度お聴きいただきましょう。

(三味線奏者・作曲家)

二〇〇六年十二月九日(土) 東京・紀尾井ホールで開催された『今藤政太郎 邦楽リサイタル』ライブ録音による演奏。

『ピエールとリュース』

原作…ロマン・ロラン

翻訳…宮本正清

脚色…竹田真砂子

出演…今藤政貴、今藤政子、坂本圭子、土屋美音子、米川裕枝、東野珠実、中川善雄、朗読…吉行和子

世界ではじめてロマン・ロラン全集を出版した小尾俊人氏に聞く

編 集 部

ロマン・ロランの出版まで

学徒出陣から

昔のはなしで、すでにご承知かも知れませんが、私は軍隊に二年間ほど行っておりまして。学徒出陣です。その前には、本屋の仕事をしていたんです。羽田書店、羽田孜という総理大臣がいました。その親父さんが羽田書店というのを開業していました。「宮沢賢治名作選」とか昔懐かしい「ヒッター演説集」などを出していました。私はそこで三年間ほど、小僧をして仕事の世界をナマで経験しました。私は十八歳ぐらいで、兵隊にはまだ時間がありました。そこで夜学へ行きました。夜学では徴兵延期ができませんので、昼間の学校に行って昭和十八年の十二月にいわゆる「学徒出陣」があつてそれに加えられ、軍隊に送られました。はじめ通信隊でした。金沢から広島に、原爆投下のちょっと前でした。それから転属になって下関駐在の部隊に送られ、船舶通信の任務に携わりました。そして終戦を迎えました。

戦争末期というのは、昭和十八年十二月からはじまるのですが、末期の日本軍隊というのは、それはひどい状態でした。九州に敵は上陸するかと戦々恐々でした。沖縄に来ていて、毎晩B29の空襲が関門海峡を目指してくるわけ

すから、夜の十一時になると警戒警報がなるんです。B 29から爆弾を毎回落とすんです。いつ死ぬかわからない状況下でした。そう言う意味では展望がない、現に自分の目の前には大勢の人間が死んでいきましたから。将来を想像できない、希望や理想などが考えることが出来ない世界、そんな中で若い兵士たちは「日本が負けるはずがない」と否定していました。私も日本が負け、そしてそれから……という想像力は働きませんでした。勝つことはまずあり得ないが、その先は……思考停止になるんです。

偶然のできごと 広告で大反響

現実問題としては三年間の徒弟時代の間、出版に関する著者、印刷物、製本所、配給先などと接触する機会があったのです。職業としての出版というものについて大体の概要をつかんで人間関係を持っていたわけです。戦後私の進路を選ぶにあたり、うちは農業でしたが、東京へ行くということは出版を職業とすることだったわけです。

前にいた書店のグループが新しく会社をつくり私に企画をやらなにかということだったのです。印刷所は空襲のため壊滅状態でしたが、私の知っている印刷所は幸い残っていて、ずいぶん便宜を得ました。これが初期の選択でした。なぜロラン全集かということですが、偶然のことです。片山先生の友人に佐々木斐夫先生がおられまして、弟が師事している関係があったものですから、出版が出来たということ。サルトルとかジッドとかロランとか並んで、その中のひとつとしてあえて選んだというわけではありません。偶然の出来事です。

ロラン作品の長期に亘る展望など全くありませんでした。その頃の新聞は二頁だけ、出版広告は一面の下段の二段十六分の一くらい、タイトルの「ロマン・ロラン全集」というだけで日本中からたいへんな反響がありました。「時は来らん」が第一回配本予定でしたが進駐軍によって出版禁止となりました。そのゲラが、メリーランド大学所蔵〈プランゲ文庫〉展で最近発見されました。〈アメリカにあった、日本の戦後〉として一九九八年、早稲田大学で展

示された二百四十二点のうち的一点でした（写真）。「獅子座の流星群」にさしかえ、ロマン・ロラン全集の出版がはじまったのです。

フランス文学界のアカデミズム、ロマン・ロラン愛好家たちのグループ化、友の会結成

ロマン・ロランには片山先生、宮本先生方のロマン・ロランに対する考え方と、東大や京大を中心とするフランス文学のグループの考え方が、全く態度が違うのです。（ただし渡辺一夫先生は別ですが）仏文学会が出していた印刷物がありました。驚いたことにそれに載った文で、フランスの字引にロマン・ロランの文章をフランス語の文例として取り扱ったのがあり、「なぜロランのようなつまらない作家を文例にするのか」という投書が載せられていました。これにはびっくりしました。ロマン・ロランの本は、仏文多数派からは孤立していました。その点では、フランス本国と同じだったといえましょう。

ロラン派にも反対するグループがありまして、私たち「ロマン・ロランの友の会」（当時の呼称）はロランの全体著作を紹介するという立場でしたが、それに対してロランが共産主義に荷担したということと、その社会的側面にしぼって「ロマン・ロラン研究」という雑誌がずっと出ました。長期に亘っていましたが、今はなくなっています。武谷三



ロマン・ロラン著／片山敏彦訳『ロマン・ロラン全集 第31巻 時は来らん』ゲラ。ゲラに suppressed（出版禁止）の文字がある。占領政策の変更で、1949年になって刊行できた。

男という有名な自然科学者がいました。彼は「ロマン・ロランの翻訳を片山が独占しているのはけしからん、云々」という批判をし、それを「日本読書新聞」に掲載しました。私はそれに反駁をして武谷批判をやったことがあります。あの頃は、私を呼んで片山の子分といっていました。私たちはすべてロランへの尊敬をともにする共通の友人という意識でした。

あの頃は共産党の勢力が強かったのですが、戦後の開放的な知的なレベルではロランに共感する読者が多数で購買力がありました。

ロランはスターリンとも会って対談していますが、自分は共産主義者ではないと明言しています。ロランの世界的名声というものをスターリンは利用して政治的勢力の世界的拡大を図ろうとしたのは明らかです。

ロマン・ロラン考 いま

ゲーテ、ベートーヴェン、ロラン

ゲーテ、ベートーヴェン、ロマン・ロランも人間の種族の親和力というか同質性というか、そう言う点ではよく似ていると思います。人類というのは精神的な高さでどこまで行けるか。昔、ゲーテがスピノザについて「地上で最も天に近づいた人」と言いましたが、それと同じ意味でゲーテ自身にもいうことができると思います。ロランは『ゲーテとベートーヴェン』という本を書きました。非常に立派な本です。同時代のゲーテとベートーヴェン、ベートーヴェンはゲーテを尊敬し、「エグモント」への序曲を作曲しています。

ロランは『最後の扉の敷居で』（デュシャトレ編、村上光彦訳、ユニテ三十四号）のなかでこのように言っています。「私は何を信ずるか」という文章でゲーテの『ファウスト』第二部の言葉を引用しております。

《Zum Sehen geboren . . .》「見るために生まれて」 *

参考「望楼守（城の望楼にありて歌ふ）」

物見に生れて、／物見をせいと言ひ附けられて、／塔に此身を委ねてゐれば、／まあ、世の中の面白いこと。／遠くも見れば、／近くも見る。／月と星とを見る。／森と鹿とを見る。／万物を永遠なる／飾として見る。／そして総てが己に氣に入るやうに、／己自身も己に氣に入る。／幸ある我目よ。／これまで見た程の物は、／何がなんと云つても、／兎に角皆美しかつた」〔森鷗外訳〕。「*ゲーテ『ファウスト』第二部第五幕「深夜」の冒頭から。〕

「人間の視覚、ものを『見るために生まれて』きている。世界にある事物を観察する。観察を深めるということは追求すること、追求すればそこでの形の全体としてわかるということ」ゲーテの言葉、さらに『マリーエンバード悲歌』という、彼が七十四歳で恋愛をし、結婚を申し込んだが断られたそのあとで書いたエレジーがあります。そのなかで絶望の境地を書いた。自分はもう駄目だから、これからの若い世代に「我が友」と呼びかけ「見て、研究して、ものの個物性をつかみなさい、そうすれば自然の秘密というものは徐々に我々に開示してくれるだろう。」それはゲーテの自然科学者としての研究態度というものを晩年に至るまでに重大なものとして感じていたか、見るということの尊重と評価、それをロマン・ロランは晩年に言及しています。彼の覚え書きから引用、これは聴覚についていわれているのですが、「私たちは十二分の十一まで見えない世界に生きている。十二オクターブの鍵盤上、赤外線の見えないスペクトルが八オクターブ余あり、紫外線の目に見えないスペクトルが三オクターブあって残りは一オクターブにみたくない。十二分の一しか人間の認識は至っていない。人間の五感が感じうる世界は実に貧しいものである。」人類への希望を若い仲間託している。人間の永遠性は未来に向かって大きく開かれている。

ベートーヴェンの場合でも年末になれば頻繁に演奏会があるのですが、人類への永遠への希求が、彼の場合でもずっ

と生きつづけていることの一例となりましょう。

ゲーテとロランは活字を媒体しなければなかなか入ってこない。しかもなお、行間をよむことが大切。そういう意味で面白いと思いました。

ゲーテ、ロラン

宗教には入らない。なぜ入らないのか？ 理性に制限を加える、認識にストップをかけるからです。クローデルがあれほどロランに信仰をすすめたが絶対譲らなかつた。しかしロランの宗教的感情は深かつた。カトリック世界が生んだカテドラルの建築は美的な創造物として人類の作った芸術である。それはしかし、信仰とはちがう。

ロランとソ連との関係

ロランとスターリン

最近、亀山郁夫という方の訳された『カラマーゾフの兄弟』という新訳の文庫本ですが、全五巻合わせて五十万部という空前の現象ということで記事にもなり、広告を大々的にやっています。その亀山郁夫という方はロシア文学者として立派な方で、今東京外国語大学の学長になった方ですが、その人が書いた『磔のロシア』という本の中に、ゴリキー論がありましてそこにロランが出てくる。また『大審問官スターリン』という別の新著を書いておられて、「その神秘——大テロルの時代」の章の問題になった内容というのは、ロマン・ロラン夫人がソビエト政府と関係があったということ、それがロランの側からでなくてソ連側の資料から出てきたと言うことですね。その問題について、デュアメル夫人がデュアメル遺稿のなかのロラン夫人のことを書いた箇所について、それを発表しても良いかどうか

という二人の間答がありました。これはフランス側からです。一方、八十年代になって、ロシア側からその資料が出てきたということで、真実はどうなのかという論争がそこから始まるわけです。

一九三五年にロマン・ロランがモスクワに招聘されます。その招聘される理由として、はじめゴリキーがパリで開かれる世界平和擁護大会にソビエト代表として出席せよという要請があり、スターリンはそれに出したくないという前提がありまして、その「招かれたロマン・ロラン」という文章がこの『大審問官スターリン』の中にあります。その所をちょっと読んでみますと「興味深いことにこの大会の日程に合わせ、スターリンはゴリキーの盟友として知られる作家のロマン・ロランをモスクワに招待した。しかし実際にこの招待は大会への出席にこだわるゴリキーをモスクワに釘付けにするための苦肉の策であった。ゴリキー研究者タラーノフによると、ゴリキーの派遣を拒んだのはスターリンの天敵と化していたカーメネフをゴリキーが弁護したことに対する復讐を意味するものだった」という。

一九三五年六月二十三日にロマン・ロランはモスクワに到着する。五日後にスターリンはロランをクレムリンに迎えソビエトの国内問題をめぐってかなり突っ込んだ意見を交わし合った。だが記録された文書はすべて政治局のアーカイヴに送られたため、その内容はごく少数の関係者を除いて当時は殆ど知られることは無かった。近年明らかにされたその時の速記録によると二人の話題の中心となったのはキーロフの暗殺事件からキーロフ関係とされた人々数百人の裁判なしの銃殺、また新しく施行された少年犯罪者に対する刑罰の規定、フランスの共産主義者で拘禁されたヴィクトール・セルジュの解放要求（これは実行された）などだった。死刑を含む全処罰が十二歳まで引き下げられたことにロランは疑問を投げかけた。それに対するスターリンの答えはいかにも言い逃れめいているが、ノシクスの言によると「進歩的人類の神（＝スターリン）に迎えられたロランは特別の大胆さも、賢さも、独創性も、洞察力も示すことは出来なかった。」そしてその書類がアーカイヴに入り極秘扱いとなった理由について次のように書いている。

「スターリンがあまりにも開けっ広げに弁解したからだ。否、ひょっとするとあまりに開けっ広げにロランをか
らかっただけかも知れない。そして相手の作家がすべて我慢するということを知りながら、彼は公然と嘘をついてい
たのである」と。両者の間で交わされた議論の内容は一切口外しないという事前の約束があった。スターリンは速記
録をおこし、入念なチェックを行い、極秘扱いにしたが、それをアーカイヴ送りにした理由はもう一つあった。それ
はスターリンの発言の中味そのものです。キーロフ（彼はスターリンに代わるべき大人物で、人間的にはスターリン
よりはるかに優れた人物であった）が、非常に非合理的な殺され方をした。そしてこのキーロフ殺害後に、関係者と
して数百人を急いで死刑に処したことにについてロランが質問をしたわけです。これは法と道徳の枠を外れたもので、
もしかすると政治的な陰謀であったかも知れない。「キーロフ殺害に加わらなかった数百人の連中もまたテロリスト
であり、ドイツ、ポーランド、リトアニアの秘密エージェントだった。」、そういうスターリンの弁解を夫のロランに
通訳しているのがロマン・ロラン夫人ですね。そのときもう一人の通訳チェコの某という人がいて、その人は二
〜三年後に粛清されて殺されてしまうのです。

マリー・ロラン夫人のこと

そういうことがあってロラン夫人がそこに出てくるということで、結局、あのロラン夫人はスターリン秘密警察長
ヤゴダの命を受けた秘密警察の先端であるという解釈ですね。それをめぐっての資料が出たとか出なかったとか、最
近わいわいと外から言われるようになったのですが、しかし〈ユニテ〉ではその問題は以前からロシアのタマーラと
いうロマン・ロランの伝記を書いた人ですが、その人の文章が〈ユニテ〉の十九号（一九九二年）に載っています。
その時のタイトルがロランの言葉で「私が擁護しているのはスターリンではなくソ連なのです。自由な諸国民の大義
なのです」つまりスターリン主義ではない社会主義というふうに見えるかと思えます。共産主義のさまざまな路線の

うちで自分以外の路線を消すためにスターリンはポリシェヴィキ第一世代（オールド・ポリシェヴィキ）コミユニスト（彼の友人たちほとんど）を全部死刑にしまったのです。

ロラン夫人は詩人としてずっと前からロランに接触があったわけですが（ロシアの詩人、作家。パステルナークから、亡命詩人ツヴェターエバあての手紙（一九二六・一・七）のなかにマヤーの名がある。詩人として、ロランに近づいたのである。）ある時期に家庭にまで入り込んだということで、先程申しました事実についてはソビエト側の資料とデュアメル関係の資料から、一応はっきりしたわけですね。だからコミユニズムとファシズムが握手した独ソ不可侵条約の成立した三九年というのはロラン夫人にとっては殆ど拷問に近い環境だったと思います。それで心理的に参ってクロードのところへ馳せ参じたわけです。そこで彼女はカトリック信者になりたいと言うんですね。ロランは別に個人の信仰の自由を束縛しないから、それはそれでいいことだったと思います。

翌一九四〇年三月、パリのレストランでクロードとロランとロラン夫人の三人が一緒に食事したことがあります。その時の話題にゴリキーの招宴の話があったのですが、その時の話の内容が、殆ど謀略の話ばかりだったということとを、ロランはクロードに言っているのです。だからロランは（社会や自分たちの立場が）どういう状態であるかということとは、実によく知っていたと思います。しかしヨーロッパ帝国主義、世界情勢全体からみて自分が発言することが、どういう意味をもつかということの考慮と、またロラン夫人の息子がモスクワにいて、親戚もいるわけで、その息子がロランに向かって「どんなことがあろうと先生は屈してはなりませんよ」と言っている。だから状況は全部分かっていたのです。のちの公開を予定した対談記録の公表許可をロランはスターリンに求めたが、それにスターリンは返事すらしなかった。

独ソ不可侵条約、あれが世界史を分割する線だった。共産主義とナチズムの握手。人民戦線の崩壊。反ファシズムで、人民戦線に希望を持った人びとへの重い鉄槌。一九三九年です。第二次世界大戦の一つの導火線になるわけです。

が、現代史の見えなかった側面ということとでそういう関係のものをもう少し詳しく調べようと思って現在資料を収集しているところです。

もう一つここに宮本さんが、亀山さんに関係資料を問い合わせたことに対する御返事の手紙があります。その中で亀山さんが引用した文献を見ると「ところで彼女が秘密機関のエージェントであったということに疑問の余地はない。機関は彼女をロランの生活に入り込ませたがその際彼女は自分なりの目的を追求していたのである。二人にはそうした疑問はロランの頭の中には浮かばなかったらうと正しく判断した、というもおそらくロランを迎え入れる所以でスターリンはロランについてヤゴダの報告書に言われていることに、より正確にはヤゴダのエージェントであるマリヤ（ロラン夫人）に関心をもったのである。そしておそらく彼女は初めてロランに会った頃、モンパルナスにある自宅のキッチンで私に言った『ロランは馬鹿だもんね』という言葉をその後見人ヤゴダに伝えたのであらう」と。まあそういうことがあって出て行くわけです。

そしてあとは亀山さんの意見がありますので読ませていただきます。「ロランと『マリア・』クダーシェフの関係はさまざま問題をはらんでいるように思います。興味の尽きない部分でありこうしたトータルな新事実を含めて二十世紀ロシアの知識人の歴史は語られるべきものと思えます。只、だからと言ってクダーシェフに対して偏見を抱くのは間違いだと考えます。エージェントであるという事実はあくまでも現代の反社会主義的視点から見てもつ部分が少なくありません。スターリンに対して、故国ソビエトに対して、私心のない人々が数多く、彼らはそれなりの信念とともに生きていたのです。スターリン時代のアーカイヴが完全に開かれた暁にはそれこそ目を覆うような事実が次々と出てくると思います。ギュンター・グラスがナチの一員であったという事実はさほど驚くべきことではありませんが、やはりそうしたトータルな事実を通して人間を考えてこそ文学があると私は考えています。告白したグ

ラスを私は個人的には支持しています。またロランの偉大さもクダリーシェフの存在によって些かも減じるものではありません。むしろそうした事実の中にあつた彼の存在の複雑さをこそ文学の対象とすることによって彼の存在は新たに蘇ることが出来るのではないのでしょうか。因みに私にとって嘗てジャン・クリストフは大事な大事な本でした。」

と。お考えは貴重な、尊敬すべきものと存じます。

現代社会と出版、本、ネット、アニメ

出版と社会

出版界というのは日本の他の社会と同じように経済優先の状況となっています。いいものを立派な造本にして出すということは大勢的にきわめて難しいです。質的な低下は、執筆者の問題でもあり、編集者の問題もあり、一般的な生活主義、経済主義の普遍化は目をおおうばかり。高いものに対する精神的緊張感が欠けている社会で、活字文化というものはますます細っていく傾向が全体的にあります。それでロマン・ロランへの関心もその例外ではないでしょう。

たしかに出版のレベルにおいて、求める理想がなかなか実現できないという事実はあります。でも何かやろうとすればその意図は必ず実現できると思う。様々な方法をあらゆる力を尽くしていけば出来ないことはないと思う。

社会的には日本社会は劣化しつつあると認識しているが、理想または目標としてはそういう状態をくい止めねばならないと思う。できる手段は、すべて全力でつくすことです。

インターネットと本

紙でなく金属の媒体を通じたインターネットの世界、つまりは情報検索には非常に便利、いかなる本も到底及びません。しかし、物事について周辺情報が得られないこと、想像力をもってクリエイションという新しい自己の発見をダメにしてしまうこと、人間社会の劣化をすすめること、これが欠点です。世界にはイマジネーションが必要、そのイマジネーションを消すのが金属の媒体です。そう言う意味で否定的です。情報検索には便利ですが、人間の時間配分においては不当な評価がありすぎると思います。

書物、本、それはある感覚、あるいは思想というものを伸ばすためには必要であります。なぜかというとな本は孤独な、自分ひとりです。いつまでもつきあってくれる媒体だからです。いくらでも待ってくれます。その本の趣旨とは違ったことを考えることも可能にしてくれます。時と所と年齢のちがいがという条件を超えて、いつも非常に親切な媒体です。

指先だけで使える金属の機械だけで、手を動かして書くということがなければ、漢字の記憶力がおちていく。日本の本の中で漢字の持つ機能は日本語の抽象能力を上昇させる。ヤマトコトバだけでは困難です。文化という見地からは本がなければ何もできない。インターネットだけで万能というのは間違いである。だから両方うまく使いこなせればいいんですが。

アニメ

新たな表現手段であるアニメ、日本文化イコール、アニメ。貿易立国日本としては、推奨することになるでしょう。僕なんかから見れば大いに恥ずべき現象です。一般的にはオリジナルで読むべきで、翻案されるのは別物です。アニメは幼稚で人を驚かせる、面白がらせることが目的です。ガイドとしては役立つし、暇つぶしに使える。しかし、口

マン・ロランの作品は真面目ですからアニメ作品には向かないでしょう。しかし、ロランを読ませるきっかけにはなりうるでしょう。メディアは使い方です。それぞれの適性があるわけで、それにあった仕方を利用することが肝心です。

二〇〇七年十月二十六日（土）読書会例会として日本出版会館において参加者からの質問に小尾俊人氏がお答えくださったものに加筆訂正されたものです。

『最後の扉の敷居で』から 7

村上光彦

資料四十六は、ロマン・ロランからミシェル・ド・パイユレ神父あての手紙で、発信地はヴェズレー。日付は一九四二年十一月八日付だ。これはド・パイユレ神父がロランに書き送った手紙（保存されていない）への返信だ。デュシャトレ氏の注によれば、ド・パイユレ神父は、ヴェズレーで十日間過ごし、その滞在を終えたとき、ロマン・ロランから『アグリジエンテのエンペドクレス、付、スピノザの閃光』（一九三一年、サブリエ社刊）を贈られた。その献辞には「ド・パイユレ神父に／ヴェズレーで過ごした日々／情愛のこもった記念として／ロマン・ロラン／一九四二年十月」とある。さらに、「ここにわたしの今日の思索の表現を見ないように」とある。

ロランはこの手紙の冒頭で、二人の情愛がおたがいのもので、多言を費やすまでもなく、認め合い、評価し合う仲だ、と述べている。つづいて彼は、「妻の性質には反抗的で規律に従わないところがありますが、その陰に隠れて、心情は根本的に気高いし、精神は公正だという点をよくごらんいただいたことと存じます」としたうえで、そうした自分の妻を神父が感化してくれた、と述べて謝意を表明している。ついで彼は、いつもの主題に立ち返る。

「わたしはといえば、あいかわらずあなたのお教えの扉ぎわにあります。わたしはあなたの数々のご本——聖トマスについての——を読んでおります。それらのご本は、扉の向こう側で、わたしには縁のない題目について語

り合っています。こう申し上げますのは、わたしにとっての大問題は数居のこちら側において、その向こうにあるわけではないからです。

問題はすべて、信ずることにあります。——数々の〈聖なる書〉を、〈啓示〉を、『聖書』および『福音書』の語る〈神〉を、〈教会〉の教義を信ずること。この一步を踏み出してしまえば、ほかになすべきなものが残ってしましようか。白状いたしますと、おかしいではないか、という皮肉をまじえてではありますが、感心してしまうことがあるのです。——（こういう言い方をして申しわけありません！）——つまり、あなたがたの大先輩である神学博士たちは、信者なるがゆえに、〈神〉の本質だとか、《もしキリストが自由であるとすれば「……」〈神〉に適すること、また〈神〉に適さざること》だとかを、勝手な顔をして論議できるのだなあと思っていることです。

ここでロランが言おうとしているのは、たとえ学識に富む大学者だろうと、超越的な絶対者である〈神〉について、人間の身で、〈神〉に適するとか適さないとか論議するのは身のほど知らずではないのか、という疑問なのだ。最後の数居を越えて〈神〉の懷に飛びこむことのできないロランのほうに、神学者たちよりも敬虔であり、慎みを心得ていると言えよう。そこで、ロランはこう言う。「もしわたしが〈教会〉の信ずる〈神〉を信じているとすれば、へりくだって頭を垂れ、またあらためて〈樂園〉の木の實を食べようなどは試みないでしょうに。わたしの束の間の人生はいまの日に置かれているのですからね。わたしとしては、この日のささやかな宇宙の束の間の法則を精査することに従事することでしょう。天空の中心にある、それとは別の広大な宇宙の仕組みのことなどは、わたしは辛抱強く〈父のみこころ〉にお任せすることでしょうよ」。そして、ロマン・ロランは彼の根本的な立場をふたたび明確にする。

「ところが〈教会〉全体が、まるで単純な既定事実が起点だというように、根拠がなく、証拠がなく、それでも議論の余地のない〈信条〉から出発するのです。公正な精神の持ち主なら、お愛想から、それともただそうあってほしいためにさえ、またただの期待とか、また危惧とかのために、『わたしは信じます』などと言えはしません。こう言うだけにしておいてほしいのです……。『こう期待します』とか、それとも『こう欲します』とか……」

《Spero dum spiro……》「呼吸するがゆえに期待する」。

ロマン・ロランがこの手紙のなかで皮肉な口調になっているからと言って、彼が信者を高みから見下ろしたり、軽侮したりしているわけではない。彼としては、できることなら理性的思考の鎧を脱いで、無心な幼児の信心に立ち返りたかったことだろう。彼はけっして無神論者ではなかった。ただ、理性的に得心しながら進める論理の階段を踏み破って、自分には信じきれない存在にさがろうと、虚空を跳躍することなど、自分に許せなかっただけのことだ。彼はド・パユレ神父に向かって語りつづける。

「わたしは否定してはいません。あいかわらず待機の姿勢を取っているのです。入り口の敷居を通ってゆく、あるいは通ってしまった人たちの歌声に、わたしは聴き入っています。いましもわたしは、ペギーの不安と懂れとに満ちた魂のなかで、どのように苦痛の多い作業がなされたかを見直しているところです。彼が受けとった返事を聞こうと、わたしは耳をそばだてています。わたしは尊敬と共感とをこめて、それを言いあらわそうと努めているのです。しかし、わたしはほかの人たちの目には、扉を開きかけている者と見えるかも知れませんが、じつは入らずにいます。クリストフ「ギリシア語ではクリストポロス。殉教者。伝説によれば、ある日聖クリストフは〈幼子〉イエスを肩に乗せて、とある川を渡らせた」なのです。彼は〈幼子〉を運んではいきますが、その

子を見てはいけません。わたしによく見えるのは、川と、その砂地、その岩なのです。それに、渡河の苦勞の辛さといったら。しかし、こうして懸命に力を尽くしたからこそ、どんなことがあっても、わたしはずっと氣力をなくさずにきたのだし、倒れないですんだのです。わたしは向こう岸に近づいています。ほとんど届きかけています……。渡りました……。せめて、ほかのもっと弱い人たちを、背中に乗せて運んだのだと言えるとよいのに！」

ド・パイユレ神父は、ロランあての失われた返信のなかで病氣についての省察を書きつけたのにちがいない。ロランは神父に答えて、この手紙の末尾のほうで、病氣を《厳しい伴侶》と呼んでいる。彼は語る。「生涯の半ばというもの、その伴侶はわたしからめったに離れてくれませんでした。それに、すでにわたしの幼年時は、それが落とされた影のもとにあったのです。それはヤコブと《天使》との小やまない闘いでした。そしてわたしには、《天使》を愛しているとは言えないのです。しかし、わたしにはよくわかっています、わたしがいまあるとおりの者になるように、《天使》はむごいほど助けて——（強制して）——くれました。——得意がるほどのことではありませんが！　しかし、《als ich kam》——《おのれのできるかぎりにおいて》ですからね……」

（成蹊大学名誉教授・仏文学）

関西日仏学館八十周年記念とロマン・ロラン研究所

共催講演会にあたって

宮本 エイ子

日本でのフランス文化発信の拠点は首都・東京の日仏学館と西では京都の関西日仏学館である。いまやインターネットの時代で情報は一瞬に世界を駆けめぐることが、日仏のシェークハンドの人的交流の中心地であることはいうまでもない。「日本ロマン・ロランの友の会」第一回の講演と音楽は当時の学館館長のロベールが「ロマン・ロランの音楽」というタイトルで片山敏彦、宮本正清とともに京都大学講堂（写真1）で講演している。ピアノ演奏は原千恵子であった。一九四八年六月のことである。その翌年には関西日仏学館でロランの演劇『敗れし人々』（写真2）が上演された。その後もロランの作品を読む読書会はロマン・ロラン研究所創設者 宮本正清を中心に

定期的に関西日仏学館で行われてきた。その関西日仏学館八十周年記念祝賀会が学館主催で二〇〇七年十一月十六日催された。席上、主催者の学館館長ジャン・ポール・オリヴィエ氏と創設に寄与した稲畑勝太郎の令孫勝雄氏のご挨拶をした。フランス政府は日本側稲畑家の不変の貢献に深い感謝を表明されている。二人のご挨拶のなかで共通して宮本正清の名が挙げられた。第二次世界大戦中の学館で起きた不幸な事件に言及された。学館で働いていたジャン・ピエール・オーシュコルヌと宮本正清が理由も示されず、逮捕され、二ヶ月間の拘留で拷問を受けた。敗戦とともに二人は解放され、それぞれ活動して長い一生を終えたが、パーティー当日の十一月十六日は

宮本の二十五年目の命日であった。十一月十六日の日程はこの日しかフランス大使が京都に来られなかったことを館長が私に漏らした。離任間近の大使ルリディック氏にもその偶然、日本式に言えば学館と生涯の大半を送った宮本正清との因縁の深さを私は話して

しみみりしたものだ。そこには日仏が敵味方で戦った戦争のおぞましが横たわっていた。宮本正清が平和主義者ロマン・ロランの翻訳に没頭していた不当な代償もあったかもしれない。平和裡だけでない日仏交流八十年の歴史をふりかえった。

「ユニテ」冒頭に掲載している狩野直禎氏の「中国研究を通しての日仏交流―京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合―」の講演が関西日仏学館八十周年記念行事のひとつとして、学館とロマン・ロラン研究所が共催する由縁である。講演のなかで示された狩野直喜の「パリは陥落し

てもフランス文化は滅びない」という名言は政治を超えてこれからも私たちの足を許を照らすことだろう。



(1)



(2)

読書会報告

清原章夫

二〇〇七年十月度の読書会は、「みすず書房」創設者の小尾俊人氏を講師にお招きして東京新宿区の「日本出版クラブ会館」で十月二十六日（土）に開催した。

読書会を京都のロマン・ロラン研究所から離れておこなったのは、一九七一年の研究所設立以来初めての試みであったので、何名の方が参加していただけるのか心配であった。

しかし小尾氏のお陰で、過去に当研究所主催の講演会で講師をしていただいた、柳父圀近先生、村上光彦先生、峯村泰光先生、山口俊章先生をはじめ東京を中心に十二名の方が参加してくださった。

京都から参加していただいた読書会々員七名と合わせ十九名が、当日の大雨にもかかわらず参集して下さっ

た。お互い初対面の方が多かったが、ロランの思想と芸術、その人格に精神的な影響を与えられたもの同志、自己紹介が済んだ頃にはいつもの読書会と同じ暖かい雰囲気会場が包まれた。

読書会は、小尾氏のご提案で講演会形式ではなく、小尾氏に参加者からの質問に答えていただくという対話形式でおこなわれた。いつも講演会の後の質疑応答の時間が短く、何か物足りなさを感じていた私にとっては、本当に有難いことであり、昼食を含む約三時間大変有意義な時間を参加者全員が共有した。

当日の内容は前出のとおりですが、特に私の印象に残った小尾氏のご発言を記しておきたい。

終戦の一九四五年十二月にみすず書房を創業された際

に、もう一つの選択肢として、ご実家の農業をお継ぎになることも考えられた。しかし、戦前のお仕事を通して本の出版方法を熟知されていたことと、戦争中の爆撃で多くの印刷所が焼けて無くなってしまったが、偶然小尾氏をご存知だった印刷所が焼失からまぬがれたので、出版屋になられたそうである。

また、みず書房が出版した最初の全集として、ロマン・ロランが選ばれたのは、当時ロマン・ロランを熱心に研究されていた佐々木斐夫先生が小尾氏の弟の教師であったという、偶然で、その機縁から、片山敏彦、宮本正清氏らとの友情の環が生まれ、ロマン・ロラン全集が企画されたことを聞かせていただいた。

私を含め戦後の日本人に計り知れない影響を与えた、ロマン・ロラン全集がこのような二つの偶然から誕生したことをお聞きして、意味のある偶然が存在することを知った。

地下鉄神楽坂駅から東京駅への車中で、京都に帰る会員の方々と来年も是非小尾氏をお招きして、東京での読書会を開催したいと異口同音に語りあった。



左から 柳父、小尾、村上、宮本の各氏 峯村氏撮影

〔読書会に参加して思うこと〕

四十五年後の感想

西尾 順子

すばらしく大きな山——そんな山があるということは知っていたが、私は今まで登ったことがなかった。心の中では登ってみたいくてたまらなかったのだが。

この間から二十日あまりもかかって私はその山に足を踏み入れた。こわごとと、そして胸をワクワクさせながら。登り始めると、この山は思っていたよりもはるかに大きく、複雑だった。はっきりした道はなく、木々がおいしげっていた。

「私には登ることができない！」
私はこの大きな山から出ようとしたが、いったん入ると

もう出られなかった。一步一步登って行くよりしかたがなかった。ただ頂上へ着きたい一心で、まわりの木のたくましさや花のやさしさに気を取られるひまもなかった。しかしハーハーと息を切らせながら登って行くと、何か心が広くなるような感じもしていた。私の小さな二つの足の裏はこの偉大な山の一部分にのっている……それだけでうれしい気もした。

やっとの思いで頂上に着いた時、私はそこで何か珍しい美しい花を見つけられるだろうかと思っていたが、私には何も見つからなかった。一生けんめい登って来たの

に……。その時、山が言った。

「その花は自分で見つけなければならぬ。もちろん初めてこの山に登った者には、そう簡単には見つけられない。もう少したって、お前の足が強くなって登った時には、きつと見つけられるだろう。」

私は楽しい気持ちで山を降りた。高い山の澄んだ空気を少しでも吸うことができたというだけでもありがたいことだ。私は何度も何度もあの大きな親切な強い山をふり返った。この山は何年たっても、さっき私が登った時と変わらないで若い登山者を歓迎するだろう。私も、きつとまた登ろうと思う。

右に長々と引用させてもらったのは、中学二年生だった私が『ジャン・クリストフ』を読んで書いた感想文である。その後長い時間が過ぎたのに私の足は少しも強くなるはず、今でもそっくり同じような感想を抱いていることに自分でも驚くばかりである。ただ四五十年前には『ジャン・クリストフ』という作品の大きさに圧倒されたのであったが、今はロマン・ロランという人物の大き

さ——広さ、深さ、強さ、優しさなど一切を含む——に目もくらむ思いがしている。

四年前から参加させてもらっている読書会では『ジャン・クリストフ』を読了し『ピエールとリュース』を経て昨年は『母への手紙』、さらに現在は『クレランボー』に取り組んでいる。第一次世界大戦のただ中で書かれたこれら三種類の文章を読むと、実在した人名や地名や歴史上の事件が出て来る。そのたびに「どんな人?」「どこ?」「どんな事件?」と頭の中で疑問符が渦巻く。自分がいかに近、現代史に疎いか、世界を動かしてきた力というものに注意を払わず、いかに無知なままに生きてきたかが思い知らされた。小説によってはその時代背景などまるで無関心に読み終わってしまうものもあるが、ロランの作品は読者にそうはさせないのだ。

ほぼ全編が「いとしい母上」で始まり「あなた方を愛するあなた方のロマン」で終わる『母への手紙』の中には、母の健康を気遣う言葉が随所に見える。しかし今回私の興味を引いたのは、彼の仕事や思考の中心が母に心配を与えない程度に率直に語られていることと、母や妹

への頼みごと(例えばパリの新聞や雑誌の切り抜きを送ってほしい、手紙の英語の翻訳をしてほしいなど)が書かれていたことだった。賢明で愛情豊かな母と妹の支えがあったからこそ、「万人に抗する一人」として孤独で苛烈な戦いを続けることができたのだと痛感させられた。

さらに、強く印象づけられたのは当時のヨーロッパにロランを信じ慕う人(“文化人”などではなく)が大勢いたという事実である。

「意地わるな論文が一つ出るたびに、私には新しい友ができます。」(一九一四年十二月十七日)

全く彼ほど沢山の“友人”を世界中に持っている人が他にいるだろうかと思う。激しい非難や悪口に交じって彼に届けられる無名の人々の手紙が、どんなに彼を力づけたことだろう。その内のいくつかを彼は孤軍奮闘する息子を案じる母に読んでもらっている。戦場で戦っている若い兵士からの手紙を書き写しながら、彼はその熱い共感に感謝しているようにさえ感じられた。

今回初めて『母への手紙』を読んだだけでもロランの交友関係の広さがうかがえた。いったい彼は生涯にどれ

ほど膨大な数の手紙を書いたことだろう。『ロマン・ロラン全集』には書簡も日記も数多く収録されているというのに私はまだ読めないでいる。でもそれらをできるだけ丁寧に読んで調べてみる必要を感じている。そうすることで、私にとってのロマン・ロランが白銀に輝くアルプスの峰のような孤高の姿ではなく、悩み苦しみながら生きる愛に満ちた人間として慕わしいものになることを予感している。

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一	5・15	ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）	宮本 正清	一九八九	4・20	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤 周一
一九七二	11・27	苦悩のなかのインド	森本 達雄	一九八九	6・9	ロマン・ロラン全集と私	小尾 俊人
一九七二	6・24	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂弥	一九八九	9・29	ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命二〇〇周年の記念に	中川 久定
一九七三	5・26	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして	高井 博子	一九九〇	11・17	ロマン・ロランとの出会いから	尾埜 善司・今江 祥智
一九七四	12・18	私の人間観	末川 博	一九九〇	1・27	ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽	新村 猛
一九七四	6・29	私の通った芝居の道	毛利 菊枝	一九九〇	6・2	ロマン・ロランとガンディー	森本 達雄
一九七六	12・5	ロマン・ロラン没後三十周年記念——講演と音楽の夕べ	佐々木斐夫	一九九一	9・26	『魅せられたる魂』と私	樋口 茂子
一九七六	7・11	ロマン・ロランとゲーテ	演奏：玉城 嘉子	一九九一	10・26	占領時代における日本社会とロマン・ロラン	小尾 俊人
		ユダヤ民族と西洋文明	岡本 清一	一九九一	11・30	ロラン・片山・ヘッセ	宇佐見英治
				一九九一	3・1	ロマン・ロランと私	松居 直

		ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番							
		ピアノ演奏…北住 淳							
11・18		「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン	11・25	ロマン・ロランと大佛次郎		村上 光彦			
		ラン	1999	ロランと音楽		岡田 暁生			
		本山 美彦	6・11	日本ロマン・ロランの友の会五十年記念コンサート		園田 高弘			
一九九七		「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと魯迅	10・8	ト					
		「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと魯迅		「園田高弘ベートーヴェンを弾く」					
1・17		わが青春と一生	12・1	お話と演奏「ピアノとベートーヴェン」					
		区 建英		ロマン・ロランとインドの精神		森本 達雄			
6・6		岩淵龍太郎	10・13	ロマン・ロラン没後五十五年と日本		佐々木斐夫			
9・19		ロマン・ロランと結核の時代	10・13	ロマン・ロランと「老いの豊かさ」		青木やよひ			
		福田 真人	二〇〇〇	シンポジウム		今井 祥智			
10・4		ピアノとチェロのための夕べ		財団法人ロマン・ロラン研究所設立三十年記念コンサート		尾埜 善司			
		ピアノ演奏…北住 淳		神谷 郁代		神谷 郁代			
		ロマン・ロラン記念コンサート	二〇〇一	「神谷 郁代 ベートーヴェンを弾く」					
		チェロ演奏…小川剛一郎	2・23	ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー		デイディエ・シッシュュ			
一九九八		柏倉 康夫							
6・8		ロマン・ロランと種蒔く人							
9・25		ロマン・ロランと政治的魔術からの解放	6・23						
		柳父 閑近							
10・30		ロマン・ロラン記念コンサート							
		ピアノ演奏…小坂 圭太	12・21						
		レクチャー…岡田 暁生							

二〇〇二	4・20	ロマン・ロラン記念スプリングコンサート ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ	おはなし 尾埜 善司 朗読 村田まち子
二〇〇三	11・11	ロマン・ロランの後継者たち 蜷川 譲	抗日中国における中仏文化交流 中国の知識人はロマン・ロランをどのように評 価したか 内田 知行
4・19	4・19	ロマン・ロラン記念スプリングコンサート 演奏…ピエール・イワノヴィッチ 郁子・イワノヴィッチ	現代の法とヒューマニズム 加古祐二郎と瀧川事件 園部 逸夫
5・10	5・10	ロマン・ロランの作品による音楽とレコード 尾埜 善司	ロマン・ロラン没後60年記念コンサート 梅原ひまり 神谷郁代デュオ ヴァイオリン演奏…梅原ひまり ピアノ演奏…神谷 郁代
5・31	5・31	戦争と平和、科学を考える ブリーモ・レーヴィを語る ジル・ド・ジエンヌ 解説 西成 勝好	生々発展する魂 ゲートとベートーヴェンそしてロマン・ロラン 交差する肖像 ロマン・ロランとクローデル
11・22	11・22	ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える 峯村 泰光	青木やよひ
二〇〇四	5・29	朗読とおはなしの会 『きょう』を読む『京都、半鐘山の鐘よ 鳴れ！』	J・F・アンス 通訳 原口 研治

二〇〇六

11・24

戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン

山口 俊章

二〇〇七

1・20

日本におけるロマン・ロラン受容史

シッシユ・デイディエ

通訳 シッシユ由紀子

琴 笙 ヴァイオリンによる新春コンサート

大谷 祥子

豊 剛秋・増永雄記

2・3

歌と朗読の会

歌：下郡 由

「ピエールとリュース」朗読

尾埜 善司 ほか 会員

7・21

朗読の会

第一次世界大戦とロマン・ロラン

そして『母への手紙』

村田まち子・宮本エイ子

10・13

中国研究を通しての日仏交流

京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合

狩野 直禎

11・6

『ピエールとリュース』を演出して

今藤政太郎

3・8

朗読の会

親子で読む・聴く『ジャン・クリストフ物語』

会員たち

任期満了による役員改選

役員名簿（二〇〇八年四月十五日 現在）

理事

小尾 俊人、森本 達雄、野村 庄吾、

宮本エイ子、永田 和子、西成 勝好（理事長）、

稲畑 勝雄、清原 章夫、長谷川治清、

シッシユ・デイディエ

監事

西村七兵衛、池垣 勇

評議員

能田由紀子、加藤 澄子、中西 明朗、

和田 義之、奥村 一彦、守田 省吾、

シッシユ・由紀子

次号（36）で役員の声をお届けいたします。

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六―一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、真に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頹廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

●講演会

●読書会・研究会

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また

●彼の周辺の芸術家たちに興味、

●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感

いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたし

ております。

●特典①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員①一般賛助会員は年会費一口五千元。特別賛助会員は年会費十口以上。

あとがき

9・11以後の世界は混乱と不信が広がり、展望のない未来が重く地球を覆いつくしているように思われる。戦争や地球環境の汚染、宗教や民族間の不信は激しさをますますばかりで解決へほど遠い。環境汚染や富の偏在による貧困からの脱却と自由への道は見えてこない。

このような今、何故ロマン・ロランなのか？ 私たちは今一度問い直してみたい問題である。

ロマン・ロランはすでに今日の状況の漂い始めた十九世紀から二十世紀にかけて、常に社会の問題に知性で対処し行動し続けた人である。「魅せられたる魂」の主人公アンネットに、動乱と混沌の社会状態と人間の苛酷な悲劇的狀況にあっても理想の夢を追い続けた。いかなる実存的な絶望の状況であろうとも……。

戦争という長い絶望の時代を乗り越えてきた戦後の日本の若者にロマン・ロランが熱狂的に受け入れられたのも、それがあったからであろうと思う。戦後多くの若者がロランの数々の著作の感性に魅せられ、知性を奮い立

たせ、日本の戦後平和思想の基盤が出来ていったのだと思う。

今、残念ながらその頃のことを知る人は少なくなり、若者にはロマン・ロランの名前すら知らないものが多い。

そんな状況の中で、今年も「ユニテ」が発行できたことを嬉しく思う。

関西日仏学館八十周年記念として学館との共催による狩野講演の詳細を掲載できたこと、それについては宮本さんも背景を記した。伝統の家に生まれた今藤氏の地道な日々の活動に加えて、若き日の精神形成に関わるロマン・ロランの『ピエールとリュース』を作品化された経緯を紹介することが出来た。日本の伝統芸能の一役を担った氏の国際的な活躍を祈念する。『出版と社会』の大著を世に送ったばかりの旬の人、小尾氏は日本のロマン・ロランブームの仕掛け人であり、ロマン・ロラン全集出版と編集の中心的役割をされた小尾氏自身からの貴重な話を得ることが出来た。連載を続けてきた村上論文に紙数が少なかったのは、御夫人の御逝去の直後のことでもあり、残念だがやむを得ないものだった。それ以上に人

生最大危機の中にもかかわらず原稿をお送りくださったことに感謝し、村上夫人の御霊のご平安を祈る。

読書会も宮本さんや清原氏の献身的な活躍で息の長い充実した学習が積み重ねられている。

このような時代にあっても、ロマン・ロランの火を消すことなく脈々とつないで来られたのを嬉しく思う。これを常に指導して引っ張ってこられた前理事長の尾埜善司氏が昨年退任の意を表明され、健康上の理由でやむを得ないとはいえ残念だ。研究所が幾度かの危機を乗り越えてこられたのも、ひとえに尾埜氏のロマン・ロランに対する傾倒と豊かな知見、そして実務にも強いリーダーシップからであった。

これからは氏の本誌上での活躍を期待したい。

(文責：野村庄吾)

(編集部)

小尾 俊人 宮本エイ子

西村七兵衛 中西 明朗

野村 庄吾

訂正とお詫び

前号(34)のあとがき(91頁6-7行)の記述に粗忽不備がありました。

『ジャン・クリストフ』の中国語に訳したのは、傳雷(一九二七年商務印書館)で……を以下のように訂正しお詫び申し上げます。

——最初に中国語訳したのは敬隠漁で、一九二六年に雑誌「小説月報」に連載しました。これは部分訳でした。傳雷は一九三七年から『ジャン・クリストフ』の全訳作業を始めて全十卷(計二冊本)の全訳が出版されたのは一九四一年です。傳雷による最初の訳出(部分訳)が、一九三七年上海商務印書館版です。一九二六年に最初に訳した敬隠漁は、一九〇一年、四川省遂寧県生まれで一九二八年—一九三〇年、リヨン中仏大学に留学して仏文学を学んだ人ですが、中国帰国後自殺(一九三一年)しました。

大東文化大学教授内田知行氏からご指摘いただきました。感謝申し上げます。氏はすでに講師としてご講演いただきます「ユニテ」三十二号にも掲載させていただいております。今後「中国とロマン・ロラン」についてご紹介いただきたいと思います。

ユニテ 第三十五号

発行日 二〇〇八年四月十五日

発行者 (財) ロマン・ロラン研究所

理事長 西成勝好

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九―五九九九六

印刷所 (株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>
E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp



ロマン・ロラン

U N I T É

Sommaire

Les relations culturelles franco-japonaises à travers la sinologie — le cas du grand sinologue Naoki Kanô professeur, et fondateur de la sinologie à l'université impériale de Kyoto	Naosada Kanô
Récit: l'adaptation de <i>Pierre et Luce</i> à la scène avec accompagnement d'instruments japonais	Masatarô Imafuji
Entretien sur la publication, pour la première fois dans le monde, des œuvres complètes de Romain Rolland	Toshito Obi
<i>Au seuil de la dernière porte</i> : réflexions (suite)	Mitsuhiko Murakami
Le 80 ^{ème} anniversaire de la création du l'Institut franco-japonais du Kansai et l'Institut Romain Rolland	Eiko Miyamoto
Rapport des réunions mensuelles du groupe de lecture	Akio Kiyohara
45 ans de lecture de <i>Jean Christophe</i> : réflexions	Junko Nishio
Activités et objectifs de l'institut Romain Rolland	
Annuaire 2007 des membres et donateurs	